

意味論的ダイナミクスと語用論的ダイナミクスについて

天本 貴之 (Takayuki Amamoto)

慶應義塾大学

本発表では自然言語の意味解釈におけるダイナミックな性質の特徴付けについて論じる。特にダイナミックな性質を意味論と語用論のどちらで扱うのが最適なのかを検討する。

自然言語の意味、特に談話の解釈を説明するためには、何らかの形で情報更新というダイナミックな側面を理論に取り入れることが必須であるというのが今日の一般的見解となっている。たとえば形式意味論において、文の意味の中心的役割を真理条件ではなく文脈の更新と捉えるダイナミック意味論は、文意味論を談話意味論へと拡張することで体系的かつエレガントに照応や前提といった言語現象の分析を可能としてきた。しかし、ダイナミック意味論はまさに意味論によってダイナミックな側面を説明しようとするため、元来得意としていた照応データに対しても不都合な予測をする場合があることが指摘されている。そもそもダイナミック意味論は単文を超えた談話の処理に加えて、英語におけるロバ文照応といった特定の言語データに動機づけられて形成された意味システムという点で特殊なものであるといえる。そのため、意味論においてダイナミクスを扱うことが最適なのかどうかは現在においても慎重な検討を要する問題である。

そこで本発表では、談話レベルにおける問題を扱うために文の意味レベルにダイナミクスを組み込む必要が本当にあるのかどうか、つまり文レベルの意味と談話レベルの意味は同一視できるのかどうかという観点から、自然言語ダイナミクスにおける意味論と語用論の関係を明確にすることを試みる。まず意味論的にダイナミクスを扱うアプローチと語用論的にダイナミクスを扱うアプローチのそれぞれの特徴を概観する。次に照応をはじめとした各種データを参照しつつ、意味論的ダイナミクスと語用論的ダイナミクスのどちらがどれだけ必要になるのかを整理したい。意味論と語用論の区別を静的システムと動的システムの区別と対応させてダイナミクスを語用論的に扱う可能性を説く Lewis[1, 2]や Rothschild & Yalcin[3]などの見解を支持し、シンプルな文意味論としての静的意味論とアップデートを実行する語用論をもつ自然言語のシステム観を擁護することになるだろう。

参考文献

[1] Lewis, K. 2012. Discourse dynamics, pragmatics, and indefinites. *Philosophical Studies* 158(2), 313–342.

[2] Lewis, K. 2014. Do we need dynamic semantics? In A. Burgess & B. Sherman (Eds.), *Metasemantics: New essays on the foundations of meaning* (pp. 231–258). Oxford: Oxford University Press.

[3]Rothschild, D. & Yalcin, S. 2016. Three notions of dynamicness in language.
Linguistics and Philosophy 39, 333-355.